

### 【修正】

前回、『輓齋詩稿続編』の「訪朴泳好」と題した須永の詩に関連し、「大正三年、余与泳好相見、別後、杳無聞矣。同五年突如寄詩、互相唱和故及」としましたが、

「大正三年」を「大正二年」に修正します。「大正3年(1914)に会った後、2年後に泳好から詩が送られてきた」とある件を「大正2年(1913)に会った後、3年後に泳好から詩が送られてきた」とします。

### 【永島メモ】

韓国朝鮮と生涯深い関係を持ち続けてきた須永ですが、玄界灘を渡ったのが果たして何回だったのかは必ずしも分かっていません。昭和40年代に須永文庫の整理に力を尽くした永島信吉氏が『須永元（輓齋）伝記資料』と題した冊子を残していますが、その表紙に次のようにメモしています。

○輓齋の朝鮮行 明治 28

大正 3

大正 8

昭和 8

々13 (秋)

これらのうち明治28年(1895)は、前回触れたとおりです。

大正 3 年（1914）は後述します。

大正 8 年（1919）は、朝鮮の政治家、金允植の日記『続陰晴史』巻十七の己未一月十三日条に「日人須永元来、三島門人、文士也」とあり、須永が金允植を訪問したことが分かります。

昭和 8 年（1933）は現時点では不明です。

昭和 13 年（1938）は 9 月 17 日に下関から関釜連絡船「徳寿丸」で釜山に入りました。その後の足取りが『昭和 13 年 須永元日記』に詳しく記されていますが、11 月 21 日に朴泳孝を訪問した後の翌 22 日から 12 月 1 日までの日記には記述がなく、12 月 2 日に神戸・三宮を出発して帰京したことが分かっています。

この朝鮮行では知人らと交流したほか、名勝の金剛山などを観光しました。

### 【海雲台】

しかし、このほかにもたびたび訪れています。大正 2 年は上述の通りですが、同年のことを記した『続陰晴史』巻十五の癸丑十一月五日条にも「日人須永元輓齋来、文人也」とあります。『輓齋詩稿続編』にも「訪金允植、賦贈」と題した作品があり、七句目に「六載重来訪」とあります。これは大正 2 年の来訪後、6 年後の大正 8 年に再訪したということでしょう。

つまり、明治 28 年、大正 2 年、大正 8 年、昭和 13 年の旅行の事実は動かさないようです。

しかし、大正 3 年から 5 年までの間にも訪れていた可能性があります。話が複雑に入り組んできますが、以下説明します。

『輓齋詩稿続編』に「乙卯八月十七日、同学圃大詞伯飲昆谷酒樓、詞伯詩先成、歩高韻、余昨歸朝鮮海雲台還故及」とあります。乙卯は大正 4 年（1915）です。漢詩人として有名だった福井学圃と酒樓で飲んだという記事に続き、朝鮮の海雲台から帰ってきたというのです。昆谷とは東京・日比谷でしょうか。「昨歸」とあるので、帰京したばかりだったかも知れません。

海雲台は釜山の有名な観光名所で、海水浴場や温泉などがあります。朴泳孝ら朝鮮貴族たちの別荘もありました。

この当時、交通網の発達で東京から釜山へは行きやすくなりました。大正 4 年 10 月の時刻表によると、時間通りなら東京午前 8 時 30 分発の特急列車に乗れば翌日午前 9 時 38 分に下関に着き、さらに 10 時 10 分発の関釜連絡船で午後 9 時 40 分に釜山に到着出来ました。

#### **【大正 4 年も確実か】**

大正 5 年については、朴泳好との詩の応酬に「合邦交厚六過年」とあることから推定しました。韓国併合の明治 43 年（1910）から 6 年経った時点のものでしょうか。「巴城一別已三年」に始まる七言絶句に次韻したもので、大正 2 年に須永が朝鮮を訪れた際に二人は会っているのでしょうか。上述の「大正二年、余与泳

好相見、別後、杳無聞矣。同五年突如寄詩、互相唱和故及」という『輓齋詩稿続編』の記述からも可能性が高いと思われます。

しかし気になる点もあります。『輓齋詩稿続編』に「訪朴泳孝賦贈」と題する作品があり、割注に「余往年訪朴於海雲台」と記されています。これは前述の「訪金允植、賦贈」に続いて書かれ、「復古合邦將九年」とあるので大正8年のものとみられますが、「別後無端過五歳」という句があります。つまり5年前の大正3年に朴泳孝と会っていることになります。

年数の数え方等に齟齬があるかも知れませんが、大正4年の釜山行は確度が高いのではないのでしょうか。朴泳孝とは日本で会っている可能性があり、また、直接会わなくても書のやり取りは可能ですが、大正3年と5年についてさらに詰めたいと思います。

2024年4月29日 広沢有久